

## 海の向こうから考える桜ヶ丘キャンパス：家族と 過ごした海外留学生活

著者	齊藤 一誠
雑誌名	鹿児島大学歯学部紀要
巻	31
ページ	15-18
発行年	2011
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/17037">http://hdl.handle.net/10232/17037</a>

## 『海の向こうから考える桜ヶ丘キャンパス』 家族と過ごした海外留学生活

齊藤 一誠

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 健康科学専攻  
発生発達成育学講座 小児歯科学分野

私は、2008年8月に渡米し、2010年3月までの1年7か月をアメリカ合衆国テキサス州ダラスという町で過ごしました(写真1)。アメリカとそこで出会った人たちの1年7か月分の思い出があり、すべてを書き尽くすことはできませんが、家族と過ごした生活の一部を書かせていただきたいと思います。

テキサスは北米大陸の中央南部に位置し、熊本県とほぼ同じ緯度ではありますが、夏は鹿児島よりも暑いのです。ダラスは山国の日本では想像できないくらい平坦な土地なので、空がとても広く、湿気が少ないためなのか、雨が少なく、雲もあまりないため、空がとても青かったのが印象的でした(写真2)。住んだところは、ダラスの北に20マイルほどの地区で、ダラス滞在中に大変お世話になった、渡邊郁哉先生(現在は長崎大学大学院医歯薬学総合研究科生体材料学分野教授)のお住まいの近くでした。アパートは、我々が渡米する前に、渡邊先生ご夫妻が先に見に行ってください、

契約までしていただいていたし、初期の立ち上げもすべてサポートしていただいたので、順調に生活を開始することができました。渡邊家のサポートなしでは、日本に無事に帰ってこられていないのではというくらいお世話になりました。ブッシュ前大統領が引退後に住んでいる場所よりやや北に位置し、治安の良い地区でした。ダラスでは日本人が比較的少なかったので、一度知り合うと、それ以降はみんな友達、一致団結して助け合うといった感じでした。同じアジア人でも中国人や韓国人、ベトナム人、インド人などの移民は日本人よりはるかに多かったですし、研究のラボがある Baylor 歯科大学にも多くのアジア人がいました。日本人の少ない地区とは言え、アメリカでポジションを得ようとする日本以外のアジア人と、母国に留まっていたい日本人とは明らかに温度差がありました。また、現地に来ている日本人の多くは、関東、関西圏の企業の駐在さんで、地方出身は研究留学している大学



写真1 : 夕暮れ時のダラスのダウンタウン



写真2 : 長男が通っていた現地校と広く青い空

関係者がちらほらいる程度でした。

留学当初、最も困ったのが、長男の学校でした。月曜日から金曜日まで現地校に通っていたのですが、最初の1週間は泣きながら学校に行っていました。その学校には日本人はいないと思っていたのですが、金曜日の朝に学校の玄関で嫌がる長男を言い聞かせていると、日本語で話しかけてくれる少年に出会いました。その子に導かれるように校内に入ることができた長男は、2週目で降学校を嫌ということはありませんでした。学校の先生やクラスの子とその親御さん、そしてその日の少年が、英語力の不十分な我々一家を快く受け入れてくださり、改めてアメリカの懐の深さに感謝しています。

アメリカの祝日は日本ほど多くないのですが、大学や会社によって暦での祝日が休みだったりそうではなかったりします。11月最後の週の木曜日はサンクスギビングの休日で、学校も水曜から木曜日、金曜日、そして土日へと連休になります。イメージとしては日本の正月といった感じです。各家庭には離れていた家族が帰省したり、親戚が集まったりで賑やかになるそうです。金曜日には日本の初売りのようなバーゲン（世に言うブラックフライデー）があり、みんな明け方（早い人は夜中）から並びます。28日はみんなクレージーになっているから気をつけたほうが良いと、アメリカ人は言っていました。どこのお店でもかなりの値引きをしていたので、本当にお買い得でした。

その連休でヒューストンまで旅行に行きました。ダラスから車で南に5時間弱のところ。ダラスは朝夕かなり寒くなってきていたのですが、ヒューストンはとても暖かく、Tシャツ姿が普通でした。年中乾燥しているダラスとは違い、海岸に近いために空気が湿っており、日本の空気を思い出し懐かしかったです。サンクスギビングの休日にヒューストン入りになったのですが、夕方ホテルに入り、さてこれからどこかに夕食をと思い、車でレストランを探したのですが、困ったことに、どこもかしこも閉まっているではないですか。マクドナルドやコンビニすら開いていないので、非常に困りました。1時間以上探し回って、唯一見つけたファミレスで夕食を食べました。日本ではたとえ元日でも、ファミレスやコンビニは開いているので、なんとかなりますよね。もしサンクスギビングの休日にアメリカへ旅行される方は、サンドイッチでも持参されていた方がいいかもかもしれません。

2008年12月のクリスマス前後には、海外旅行に行ってきました。海外にいるのに変な表現なのですが、カ

リブ海の楽園、ドミニカ共和国に行ってきました。キューバの南東に位置し、ハイチ共和国と島を二分し、その東側で、カリブ海を挟んで南にはもう南米大陸があります。黒人と白人の混血が多く、スペイン語を話す陽気な人々に接していると、こちらまで陽気な気分になります。いい意味でも悪い意味でも、日本とは全く違う国でした。クリスマス休暇にどこかに行こうかと、いろいろ調べていたのですが、たぶん二度と行くチャンスはないだろうという理由からドミニカに決めました。アメリカの旅行会社のサイトから航空便、ホテルなどを押さえていざ出発です。留学してからアメリカで飛行機に乗るのも、ダラスの空港に車を駐車するのも、飛行機会社もすべてが初めてづくしだったので、やや漠然とした不安感を持ちつつも、何とかかな々と楽観視していました。最安のチケットを取りましたから航空会社はデルタ航空で、デルタ空港のハブ空港のアトランタ経由でドミニカ入りとなりました。

朝3時に家を出発し、4時には空港に着いていました。こんな早朝なのに人もちらほらいました。思っていたより早く手続きが終わってしまい、待合室でかなり待つことになりましたが、時間通り（ダラス発7:00）に飛行機に乗り込みいざアトランタへ。アトランタでは出国手続きが必要でしたから、それなりに時間がかかるかなと思っていたのですが、飛行機に乗り込む直前のカウンターでパスポートからI94をチョイと剥がしてそれで終了でした。入国する時とは全く違いますね。プンタカナ行きの飛行機に乗り込み4時間くらいのフライトでドミニカ入りとなりました。プンタカナの飛行場は、南の楽園らしく薫草き？屋根の南国ムード満点の建物でした。沖縄を思わせるやや蒸し暑い湿った空気がとても印象的でした。日本人ということもあり、入国審査は2、3の質問がありましたが、何の問題もなくドミニカに入国できました。後は預けていた手荷物を引き取ってホテルへ行く手筈でしたが、ここでトラブルが発生。待っても待っても手荷物が出てきません。終いにはベルトコンベアが止まり、次の便の荷物が回りはじめました。荷物がなくなるトラブルは、人の噂で聞いてはいたのですが、「荷物がなくなるとかあるんだーこんな見ず知らずの国で～。辺りの人はスペイン語しか話してないし～。日本人なんか一人もいないし～。どーすんの～」って感じですよ。デルタ航空の窓口で荷物が着いてないことを告げて、紛失届を記載しました。「まー手違いでどこか知らない所に送られたのだから、紛失届書いてもたぶん戻ってこないんじゃないの～。海パンや水中メガ

ネもないし、着替えのパンツもないけど、買えば何とかなるか〜。」などと考えながら空港を後にしました。ホテルまでは車で30分程度でしたが、道中地元の人々や家などが見れて、何となく南の楽園にきた実感がわいてきました。ホテルに着いたところには太陽も沈みやや暗くなってきていました。フロントの人と荷物が届かなかったことなど話しながら、部屋に案内されやっとひと段落できました。

ドミニカにはリゾート施設として開発された地区がいくつもあり、北米からだけでなく、南米や欧州からの旅行者も多かったです。特にスペイン語が公用語なので、南米からの旅行者からも親しまれているように思いました。そんな南米調のおおらかな調子なので、我々の荷物も探してくれているのかどうか、正直怪しい気もしましたが、翌日の夜には無事ホテルに荷物を届けてくれました。なぜかアメリカン航空の人が（我々が使ったのはデルタ航空...）。日本では考えられないくらいの笑顔で、「お前、ハッピーだなー」と言っていました。

24日のクリスマスイヴの夜は、ドレス姿やフォーマルウェア姿のお客が多く、子供に持参していた甚平を着せて、予約していたホテル内のレストランで夕食を食べました。甚平は現地の人や旅行者にかなり受けていました。それにしても常夏のクリスマスはもう経験することはないかもしれません（写真3）。

帰りは、アメリカへの再入国となりますので、厳正な入国審査を経て入国となります。しかし、飛行機の大幅な遅れがあり、アトランタ入りが2時間近く遅れました。入国審査をしてからダラス便へ乗り換える必要があるのですが、出発まで30分しかなく、ダラスへの最終便だったこともあり、それは走りに走りました。入国審査の係りの人も察してくれて、非常に簡略化し



写真3：常夏のクリスマス



写真4：ハロウィン：近所の家を回って「Trick or Treat」と言ってお菓子をもらいます。長男の大親友 Preston とその母親の Jereme

た審査だけでほぼ素通りに近い感じで通してくれました。なんとかダラス便に乗れて、無事荷物の受け取りもできました。家に戻ったら、長男の大親友の Preston とその母親の Jereme（写真4）が玄関に「お帰り」の風船を付けていてくれました。

話は飛びますが、5月にもなると、テキサスは夏になります。さらに7、8月は毎日大変暑いですが。体温超えも珍しくありません。しかし、大学内はエアコンをガンガンガン効かせていますから、逆に非常に寒いのです。なぜか冬もエアコン（クーラー）がガンガン効いているのですが、厚着しているのです、なんとか耐えられます。しかし、夏は外が非常に暑いために、薄着になってしまい、室内では手足が冷たくなって、まるで拷問のようでした。あまりにも寒そうにしているの、ラボの秘書の人が、コートと温風機を貸してくれました。余談ですが、これは飛行機でも同じです。もし夏に国際線やアメリカの国内線に乗る機会があったら、ぜひ長袖を持参されたほうがいいですよ。国際線ではブランケットが一人に一枚ありますが、それでもかなり寒いです。さらに国内線ではブランケットの貸出すらありませんでしたので要注意です。

2009年9月には次男が誕生しました。初めてのアメリカでの出産、高額な医療費、無保険、私と家内の親がどちらも来れないなど、多々問題はありましたが、渡邊家や近所の人たちのサポートもあり、無事に産まれてくれました。写真5はアメリカ式ラップ法です。見た目がイモムシ！大判のおくるみ（swadollar）でくるんでしまうのですが、ミルク、おむつの交換、お風呂以外ほぼ一日中これに巻かれて過ごしています。ほとんどグズルこともなく、スヤスヤ寝ていますし、



写真5：アメリカ式ラップ法（次男）



写真6：同じラボに留学していた韓国の先生とご家族  
同じ無保険で同じ病院で二日違いで出産

たまに起きてはいますが、遠くをゆっくり見ながら静かにしています。たまに swaddollar から出すと、どうも不安みたいで泣いてしまいます。これには正直驚きました。おなかの中に近い状態なのでしょうね。入院期間についても大きな違いがありました。日本では産後5～7日で退院だったと記憶しているのですが、こちらでは産後2日で退院でした。人によっては（州によっても異なるのですが）出産した日に退院ということもあるようです。無痛分娩が多く母体の消耗が少ないこととアメリカの保険制度によるものです。食事はオーダーできるのですが、ステーキ、ハンバーガー、サンドイッチなどアメリカらしい食事が並んでいました。スターバックスのデカフェがあったのには驚きました。慣れないアメリカでの出産ということで、何かと苦労もありましたが、我々にとっては最も貴重な体験となりました。

この1年7か月という期間に、楽しいこと、苦しいこと、悲しいこと、うれしいことも多々ありましたが、我々にとってはかけがえのない貴重な時間でした。多くの人に巡り合い、その人たちに支えられて我々が生きていることに改めて気づかされた留学でもありまし



写真7：長男が通っていた週に一度の日本語補習校にて、  
子どもの歯についての講演

た（写真4、6、7）。最後になりますが、ダラス滞在中にとっても楽しい時を一緒に過ごしていただいた渡邊郁哉先生とご家族に厚くお礼申し上げます。そして、我々を家族のように受け入れてくれた Mrs. Jereme stile と Mr. Preston stile に感謝の意を申し述べます。